

山形大学研修会「第15回FD合宿セミナー」

【第1チーム】FD合宿セミナープログラム及び記録

プログラム抜粋

FD合宿セミナーに当たって

学士課程教育の充実のためには、第一義的には各学部がその責任を負っていますが、学部の専門を超えた幅広い学びのあり方や授業の改善、学生の主体的な学習支援などは、学部の垣根を超えて全学的に取り組まなければならない課題です。また、生き残りをかけた大学改革に際し、授業の充実は最も重要な課題の一つでしょう。

今回のセミナーの第一の目的は、「個々の教員が、大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法・授業方法などについて、あたらめて主体的に検討し、再構築していただくこと」です。この目的を達成するために、まず、参加者の皆様に御担当いただく新しい授業科目について考えていただきます。そして、そのシラバスをグループで協力して作成していただきます。こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています。

セミナーは、大学への参画意識を高めるための2つのプログラムと、シラバスを作成するための2つのプログラムから構成されています。各プログラムは、グループ作業を中心に組まれており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

また、「大学間・学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他大学・他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が大学の教育分野全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーは東日本地域の「FDネットワーク“つばさ”」を始めとして、全国の大学に開かれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されることを願っております。



第1チーム参加者と山形大学小山庄長（前列中央）

第15回 山形大学FD合宿セミナー日程表

期 間 第1チーム：9月7日（月）～8日（火）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当
12:45	山形大学小白川キャンパス 集合	
13:00	送迎バス 大学出発	
13:45	会場到着・受付 記念撮影 セミナー開会 開会のあいさつ	司会：小田
14:30	オリエンテーション	小 田
14:50	アイスブレイキング	小 田
15:00～16:30	プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」	小 田
16:30～16:40	休憩（10分間）	
16:40～18:10	プログラムⅡ「理想の大学をつくる」	小 田
18:10～	夕食・懇親会	小 田
20:30～	入浴・休憩	
22:30	就寝	

○第2日目

時 刻	項 目	担 当
7:30～	朝食・部屋退出	
8:30～10:00	プログラムⅢ 「科目設計1：授業名と目標，内容の作成」	小 田
10:00～10:10	休憩（10分間）	
10:10～11:40	プログラムⅣ「科目設計2：シラバスの完成」	小 田
11:40～	修了式	小 田
12:15	送迎バス出発	
13:00頃	山形駅経由 大学到着 解散	

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓してください。
- 寝室では、飲食はご遠慮ください。



開会の挨拶 小田学長

オリエンテーション

1 FDの必要性

- ① 大学の組織的教育力の向上
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学教員個々の教育力の向上
- ④ 大学生の質的変化への対応
- ⑤ 大学の社会的な教育責務の明確化

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えること的位置付け
- ② 教育の基本的構成要素、大学における各科目の存在意義、授業設計、成績評価法などをあらためて整理する。
- ③ 教員相互の交流

3 セミナー形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：6班
班の構成員の年齢は幅広くする。
- ③ 各プログラムに、毎回、総合司会者と記録係を置く。（各班の持ち回り）
- ④ 各班に、毎回、司会者と記録係、発表者を置く。（持ち回り）
- ⑤ 全体と各班の記録係は、各プログラム終了後に記録を提出（この記録は、コピーした後、速やかに全班に配付）
- ⑥ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表と質疑応答に対し、5段階で評価を与える。（この評価は、毎回回収し、整理した後、速やかに掲示する。）
- ⑦ 合宿セミナーに関するポストアンケートを実施

4 各プログラムの基本的形態

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ○各プログラムの講師による作業内容の説明 | 10分 |
| ○グループ作業 | 40分 |
| ○発表 各グループ
(各グループの発表時間4分×6班) | 24分 |
| ○全体討論 | 16分 |

全体で 90分

プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」

○各班同じテーマ プログラムⅡも念頭に置く。
現実的、具体的に解析する。

- 1 大学には何が求められているか？
 - ・社会は大学に何を求めているか？
 - ・学生のニーズ
- 2 大学の置かれている状況分析
 - ・そこには、どのような課題（問題）があるか？
 - ・長所（望まれていること）
 - ・短所（望まれていないこと）
 - ・その生じさせている理由・原因は何か？
- 3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラムⅡ「理想の大学をつくる」

プログラムⅠの問題点などを踏まえた上で、理想の大学をつくるためには、これからどのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。大学の理念・目標を実現するための具体的な行動目標、大学の「個性」と「売り」をどのようにするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められている。

- 1 大学の理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- 2 方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- 3 実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書など）
 - ・その宣伝・普及の方法（4年計画案）
 - ・組織論（学部、学生の入口と出口（入試制度と就職）、委員会制度など）
- 4 評価（測定方法、学生、教員、ステークホルダー）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する（誰がどのようにして）

プログラムⅢ「科目設計1：授業名と目標、内容の作成」

ここでの課題

シラバス作成作業の第1段階として、各グループごとの課題に対応した授業名と学習目標の設定を行う。

プログラムⅢ,Ⅳの各グループの課題

- A班：大学の個性を発揮する授業
- B班：主体的に考える力を育成する授業
- C班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- D班：国際性を培う授業
- E班：21世紀の諸課題に対応する授業
- F班：職業意識と労働意欲を培う授業

学習方法と道筋（戦略，学習方略）を明示する。具体的には，学習者が到達目標に達するために必要な学習方法の，種類と順序を示す。

作業1 授業名の決定：○○○○○○○○○○（仮称）←内容確定後，最後に決定？

作業2 学習目標の設定

1 踏まえておくべきことから：

- (1) 教員中心ではなく，学生による学習を中心に考える（教員の果たすべき役割の再検討）
- (2) 大学に対する社会的ニーズ
- (3) 大学の全体的な教育目標

註：(1)について

大学の役割

- 講義の提供 → 学習方法と教育方法のデザイナー
- 学生から独立 → 教員と学生を一つのチームと考える
- 学力差を明確にする → すべての学生の能力と才能を引き出す

成功へ向けて

- 伝授する資源の重視 → 学習と学生の成功の産物を重視
- 資源の量と質の重視 → 産物の量と質を重視
- 入学生の質の重視 → 卒業生の質を重視
- カリキュラムの発展と拡大 → 学習技法の発展と拡大
- 大学の質・内容の質 → 学生の学習の質

使命

- 知識の提供・伝授 → 学習を生み出し，知識の発見と形成へ
- コース・プログラムの提供 → 強力な学習環境の提供
- 教育の質の改善 → 学習の質の改善
- 多様な学生への対応 → 多様な学生を卒業させる

教育

- 教員中心・知識伝授 → 学生中心・知識発見
- 教育の質 → 学習の質，学習効果・効率
- 指導者としての教員 → 学生の才能・能力を引き出す助言者
- 個人的・受動的学習 → 共同的・行動的・能動的学習

2 学習目標の記述

各科目の学習目標を表現することの必要性とその表現方法を学ぶ。学習の効果は，教育の受け手（学習の主体）である学生の変容で評価されるべきである。そのために，①授業の目標と②到達目標を定める。

註：授業の目標を作成する際の注意点

原則

- (1) 学習者を主語として書く

(2) 学習の結果、いかなることができるようになるかを明示する

記述内容

- (1) 知識・技能の学習がなぜ重要か。それによって学生の要求がどのように満たされるかを明示する。
- (2) 複雑・総括的な概念を持つ動詞を用いる。
知る, 認識する, 理解する, 感ずる, 判断する, 評価する, 考察する, 位置付ける, 実施する, 適用する, 示す, 創造する, 身に付ける, 等々
※単純な行動を示す動詞は用いない(述べる, 列挙する, 選ぶ, 記載する等々)
- (3) 必要な目標分類(認知・態度・技能)を総括的に含める。

註：到達目標を作成する際の注意点

授業の目標を達成するためにどのようなことができるとよいか, 具体的に明示する。

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 動詞を含むこと
- (3) 「理解する」のような概念的言葉ではなく, 観察可能な行動を具体的に表す
- (4) 授業の目標と関連していること
- (5) 到達レベルを書く
- (6) 認知, 態度, 技能を分けて書く
 - 知識**(認知領域)：知識を得て理解し, 一定の能力を獲得する
述べる, 説明する, 分類する, 比較する, 解釈する, 推論する, 一般化する, 適用する, 結論する, 批判する, 評価する, 等々の動詞
 - 技能**(精神運動領域)：知識・能力を活かして意識的・具体的に行動する
感ずる, 始める, 模倣する, 工夫する, 行う, 創造する, 触れる, 調べる, 準備する, 測定する, 等々の動詞
 - 態度・習慣**(情意領域)：獲得した知識・能力を, 情報として相互に提供交換し合う
行う, コミュニケートする, 協調する, 示す, 表現する, 系統立てる, 参加する, 応える, 等々の動詞

作業3

原則として, 週に1回90分の授業を15回実施するものとして, 授業の内容を考えてみる。その際, 授業の順序と各回の内容, 学習法, 利用する媒体, 資源などについて明示する。授業外学習(主体的学習, 予習・復習, 宿題)についても適切に配慮し, 授業全体をデザインする。内容によっては, 授業の目標, 到達目標, さらに科目名についても変更が必要になるかもしれない。

註：学習方法の種類

- (1) 受動的学習法：講義など
- (2) 能動的学習法：①グループ討議(演習, セミナー, ディベートなど)
②実験・実習
③自習(読書, 個人研究, コンピュータ活用学習など)

註：学習のための資源

- (1) 人的な面で：
- (2) 物的な面で：①場所
②媒体(スライド, OHP, 標本, VTRなど)
- (3) 予算

プログラムⅣ「科目設計２：シラバスの完成」

ここでの課題

プログラムⅢで作成した授業について、シラバスを完成する。

○成績評価

その位置付け

- (1) 教育評価は、学生、教員、カリキュラム（目標、学習方法の立案（方略）、評価）の三者が対象
- (2) 成績評価は、その中の一つ。

留意点

- (1) どの行動領域を評価するか
 - ① 知識（認知領域）
 - ② 技能（精神運動領域）
 - ③ 態度・習慣（情意領域）
- (2) いつ評価するか
 - ① 学習前（プレテスト）
 - ② 学習中（中間テスト）
 - ③ 学習終了後（ポストテスト）
 - ④ フォローアップ・テスト
- (3) 評価の目的
 - ① 形成的評価：学生が理解している点、理解が不足している点を発見し、学習法、教授法へのフィードバックが目的。最終評価の参考にしない。
 - ② 総合評価：到達目標に対する学生の到達度を計測する。
- (4) いかに関評価するか、複数の評価項目のウェイト
 - ① 論述試験
 - ② 口頭試験
 - ③ 客観試験
 - ④ 実地試験
 - ⑤ 観察試験
 - ⑥ 論文（レポート）

評価の持つべき性格

- (1) 妥当性：計測しようとする項目を計測できる方法か？
- (2) 信頼性：計測結果の再現性は良いか？
- (3) 客観性：計測者（教員）が替わっても、同じ結果が得られるか？
- (4) 効率性：経済的にも時間的にも実用的か？
- (5) 特異性：なぜ、そういう解答がなされたか分かるか？

プログラム I 記録 「大学へのニーズと課題」

ラ・フランス (A班)

司会者：
記録者：高橋
発表者：

◎大学に何が求められているか。

- ・学生のニーズ
 - ・まともな人材を出してほしい。
 - ・理系技術者を増やしてほしい。
 - ・理論物理…みんなが大学に残るわけではない。
 - ・高校までは先生が引っ張って行ってくれる。
 - ・個人的に怖いのは、近年、大学が高校化してきている。(成績重視)
 - ・農業の現場に行く人が少なくなっていることを悩んでいる。
 - ・医療の立場、国家試験のために伝えなければならない。
 - ・学生より親の方が国家資格があるから大学に来る傾向がある。
 - ・会話の成り立つ学生を送ってほしい。
 - ・患者側、正しい検査ができる学生を送ってほしい。
 - ・国家資格の合格率を出して学生集めをしている現実。
-
- ・人間力をもつ人材を養成してほしい。
-
- ・農業関連産業はたくさんある。
 - ・実習との関わり。(弘前大学修士課程が減ってきている、他大学にいつてしまう)
 - ・大学で学んだことと外で行うことが異なる。
 - ・昔は高卒で就職したケースがあったが、今は大卒で普通の時代になってきている。
 - ・学生の欲しいのは、・・・ください。(国試の問題、答えがあって当たり前、もらって当たり前)
 - ・学びたくて来たのに、何で来たのかわからなくなってきている。

教員のレベルについて

- ・考えることよりも、知識を詰め込むことになっている。国家試験の数値にとらわれている。
- ・試験前になると医療関係の予備校の講師が来て講義をするようになってきている。
(聖隷クリストファー大学)

↓
お金がかかる



チーム栄屋（B班）

司会者：前田
記録者：石垣
発表者：鈴木

1. 大学には何が求められているか？

文科省が示す大学に求められる特徴

- ・それは社会が求めることか？
- ・私立でも地域貢献が大学に求められる。それは、地域によっても異なる
- ・学生が求める大学
- ・農業大学校に求められることは明確。しかし非農家出身者増加により齟齬が生じる
- ・ものづくり大 ニーズ明確。国立大は特徴を出すのは難しい
- ・社会が求めるニーズと学生のニーズは一致するか？一致しない場合に、就職に結びつかないことも生じやすい
- ・大学教育が社会ニーズ即戦力だけ求められることでジレンマ
- ・即戦力は今の社会のニーズ、20～30年後新たに仕事を作り出せる能力を育成する教育必要
- ・四日市…公害・環境が特徴となる。それで、地元以外からのニーズはあるか？
- ・地域には地元で活躍できる人材を育てる地元大学のニーズもある

2. 大学が置かれている状況分析

- ・実用性に結びつく学部学科が残る傾向

課題

- └ 専門学校化
- └ 首都圏集中
- └ 就職率が求められる

長所

短所

望まれていないこと

- ・存在が地元にも望まれない大学もあり
- ・地方大学は学士号がとれる専門学校にみられている
- ・就職率が高ければよいのか

3. 現実的な制約・問題点 改革の必要性

- ・少子化
- ・親の意識度他
- ・不要な大学を廃止？ → 学生の質向上
↓
- ・個性
- ・地域貢献

いも煮（C班）

司会者：村瀬
記録者：小塚
発表者：川口

1. 大学へのニーズ

- *社会 ① 即戦力、対応力のある人間
- ② 一方 課題提出、提案力のある自体的人間

ギャップ



- *学生のニーズ（親・家族）…就職ができるかどうか、将来像

2. 状況分析

- *地域貢献などあるが、課題の具体性不足

*学生の個性が伸ばせていない

3. 現実的な問題

*求められているものが、以前不鮮明

- 例) ・基礎力、一般的学力
- ・研究的な思考、考える力
 - ・人間性、個性
 - ・応用力、適応力
 - ・課題を見つける力、提案力

ボンジーア (D班)

司会者：

記録者：

発表者：

1. 大学には何を求めているか

- ①社会が
- 人々が 健康
 - 大学の知を人々の知とつなげていく
 - 社会でリーダー力を発揮できる人材を大学
- ②大学での教育が生活に活きないと効果がない
- ③人々の暮らしが豊かになること

◎ 社会に必要な人材の育成が必要

- 子供のために教育
- 老人のために

アウトリーチサービス

社会

リーダーの育成

21世紀型のスキル、思考力、主体的に判断し行動できる人

大学

理想を描ける場

職場と一般生活に

- ・学生のニーズ → 教師が火をつけ
- ・どんな人材を育成していくのか

スペシャリスト

人材育成



共通しているのがリーダーの育成

思考を向上させる場があったりする

《学生のニーズ》

- 自分の興味を
 - ①学び方を学ぶ
 - ②就職のこと 希望する就職先に就きたい、そのための学びの場
 - ③自分自身の関心
- 絵が描きたくて

自己の特徴と方向性

就職との関連

- 国家資格取得のため
周りからすすめられて 向き不向き 挫折した学生

まとめ

学生が迷いがある

学生のニーズ

①スペシャリスト

②将来的な就職 OUTPUT

2.

- ブラジル 親からすすめられて大学に行くことなんてありえない。主体性のない日本の大学生。人間教育から始めなければならない。
- 優秀な学生をどう集めていくのか。優秀な留学生 解決の糸口→大学の生き残り戦略
- 主体的な態度が持てない大学生

養成プログラム

対人サービス 人間性豊かな学びの時間 地域交流

第一に資格を取る事優先

モチベーションが低くなっている

3.

- 現実的な問題 改革の必要性
大学独立のやるのではない。高校と大の連携を強めるべき
高校にもっと交流をもつべき
- 国際交流 留学生 フランス・ドイツの留学生を見る事でも刺激を受けるのではないか
海外との連携 ゼミ、スカイプ

マイノリティー 小数派

親からのすすめ

自分の道を決めること

本当に自分がやりたいことが、社会に活かされる人物となるのではないか

新たな血を入れる

道に外れてもよいのではないか？



つばさ（E班）

司会者：
記録者：
発表者：

学生・親・社会＝ステークホルダー
何かを与えてくれるという期待

VS

大学サイド：教員・職員
学生に主体的に学んでほしいという期待

↓

GAP！！

1. 大学には何が求められているか
社会からのニーズ（社会集団の区分が必要）
 - ・ 知の集積地
 - ・ 問題解決能力、社会常識、基礎的な力を身につけさせる学生からのニーズ
 - ・ 自分を成長させてくれること
 - ・ 就職先
 - ・ 大学ブランド、費用対効果
 - ・ 興味を追求できる自由な場所
2. 大学の置かれている状況
 - ・ 「やる気はあるがやり方がわからない学生」と「やる気のない学生」の切り分け
 - ・ 学生が受け身、サービスを受けている感覚
 - ・ 学生に与えすぎない
 - ・ 学生と教員の認識のギャップ
3. 現実的な制約・問題点・改革
 - ・ 学生にやる気を出させるための工夫
 - ・ 学生の意識改革
 - ・ 資格試験を受けさせる
 - ・ 発表したら加点するなどの工夫
 - ・ 教員が最先端の研究に取り組んでいる姿を見せる

スチューベン（F班）

司会者：新井
記録者：工藤
発表者：渡部

◎社会的ニーズ

- ・ 問題解決力
 - － 自主的に考え、行動するための基礎力
 - － 専門的な知識は企業はそれほど求めていない
 - － いろいろなところのいかにフレキシブルに対応し、自主的に解決するか
 - － 指示待ちではなく、自分で問題解決の糸口を見つけていく
- ・ 英語やコミュニケーション能力
- ・ 課題の期限を守らせるということやメールの作法などの教育も必要
 - － 企業では当然のように求められているが、大学で教員自身の意識も薄い

◎企業のニーズ

- ・ 4年制の大学を卒業する学生には、経営の幹部候補生になれる可能性を持った人材を求めているの

ではないか。チームマネジメント能力も必要

- ・今の大学教育でQCD（品質、コスト、納期）の話が出てくることはほとんどないので、それと関連する教育も必要ではないか

◎学生ニーズ

- ・就職に有利な学習
 - －資格取得
 - －国際交流
 - －フィールドワーク
 - －学習支援
- ・アクティブラーニングなど社会とつながる学習・実習
- ・学生は大学を就職するための一つのステップと考えているのではないか

◎課題

- ・大学は学生をどこまで面倒をみればいいのか
- ・成長していく学生は成長していくが全員は難しい
- ・大学で実践を伴った教育をどう実行していくか

◇グループ作業記録 プログラム I 全体討議記録

A班（ラ・フランス）

- ・「まともな人材」を出すことが社会のニーズ
 - ↳ 知識（特に実学分野・資格試験合格力）
 - ↳ 人間力（特に基礎分野）
 - ↳ 特に保護者が求める
- ・課題…学びたい人を優先すべき
現状：単に数値のよい大学に学生が流れる

B班（チーム栄屋）

- [1] ●求められるもの 文科省と社会で一致している？
- ・地域貢献…地域ごとに特色を出す
 - ・まともな社会人を出す…具体的な目標が明確な大学は良い。総合大学は？
 - 就職がよければ社会のニーズに一致している
 - 新しい職業をつくる大学もあればよい
- [2] 実用性のある大学が生き残る
- [3] 少子化

C班（いも煮）

- [1] ・「即戦力」を求めている それは何か？（結論でず）⇔しかし基礎力も必要
- ・求めるニーズは、社会と学生の間でギャップがある
 - ・「即戦力」の捉え方次第で大学に個性が出る

- ・基礎力 ・しっかり考える力 ・人間性、個性を伸ばす
 ・応用力、適応力 ・提案力、探求心
- ） ← これらが大事

D班 (ボンジーア)

- [1] ①健康で豊かに暮らせる「知」 ②それを実現する人材育成
 ③就職・資格取得 (学生の側から)
- [2] 学生に主体性がない 資格取得のプログラムになってしまっている
- [3] 留学生の活用 男女の個性の違いを活用する
 社会人の活用→グループダイナミクス
 高校生のうちから大学生活を考えさせる 多様なプログラムを提供する

E班 (つばさ)

- ・学生も親も大学から与えてもらうことを期待、教育は学びとってもらう事を想定←GAP あり
- ・教育は基礎教育を重視 学生は実用性、モラトリアム性を期待
- ・学生に与えすぎず、やる気を引き出すことが大切
- ・すべての教員

F班 (スチューベン) 現状認識の意見交換が主

- [1] ・基礎力が社会で求められる (問題解決力の土台として)
 - ・コミュニケーション能力 (英語を含む)
 - ・責任感を身につけさせる
 - ・企業はマネジメント能力も求めている
- [2] ・実践力を養う場が大学にない

討 論

- ◎与えてほしい学生と学び取ってほしい大学 (教員) の GAP が共通認識として出された
- ◎ボンジーア 留学生・社会人の活用→大学の個性化につなげられる
- ◎理想は一言ではまとめられない。更なる討議をのぞむ



プログラムⅡ記録「理想の大学をつくる」

<h2>ラ・フランス（A班）</h2>	司会者：久米 記録者：針谷 発表者：高橋
<p>キーワード 人間力向上 → 個性的（先鋭化）？ 徹底的に学びたいことを学べる（自由）？ ① <u>夢</u>がかなえられる大学（カリキュラム先行ではない）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・そもそも教員が抱えている夢とは？話すことでコミュニケーションできる ・夢を見つけることのできる大学 ・学びたい気持ち 学ぶことで質問が出て教員と双方の関係が構築できる（相手を知る、互いを知る） </div> <p style="text-align: center;">↓ 具体性が出てくる</p> <p>禅問答</p> <p><u>教員と学生の距離が近い</u></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・講義の時は？一見無関係の発話も何らかの関連があることにつなげる ・コミュニケーション力の向上 ・教員の熱意は必ず伝わる。やる気がないのも伝わる。 ・厳しさと配慮 </div> <p>1, 2年：夢を見つける 入口は1つ 転学科しやすくなる 文理分けないー理論を積み上げる</p> <p>3, 4年：夢を叶える 障がい者でも自由に学べるサポート</p> <p>入試 小論文、テストよりは集団討論などで、抱えているものを出してもらう 評価 自己評価 夢を叶えられたかどうか。学生の過大評価、過小評価も把握する</p>	

<h2>チーム栄屋（B班）</h2>	司会者：佐藤 記録者：前田 発表者：石垣
<p>理想の大学をつくる</p> <p>大学の理念・目標 「社会に出て役に立つ主体性を持つ学生を育てる大学」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アクティブラーニングなど ・卒論、研究（専門性）など ・問題解決能力、想像力などが養われるような仕組みを作る <p>方略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題探求型授業：創造プロジェクト（一貫性のある教育） ・専門性教育：1年生から専門的な授業、卒論に近いテーマを与える ・1年生からやりたいことを認識させる＝カリキュラムを流動的にくむ <p>実行計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員のコマ数の問題あり。 	

- ・ 入口：AO入試などで主体性の高い学生をとる。仮配属を1年生で行う
- ・ 出口：卒業を厳しくする。卒業時の学生の質をそろえる。主体性と社会の役に立つ学生は就職率も高い。(就職はあっせんしなくても自分で見つけられる?)

評価

- ・ インターンシップで企業の方に採点してもらう
- ・ 課題探求型の評価が高いかどうか
- ・ 卒論の発表などの能力を評価

いも煮 (C班)

司会者：高嶋
 記録者：川口
 発表者：高嶋

1. 大学の理念・目標

キーワード「学んで良かった」と思える大学
 「真の個性を育てる」 → 「社会に出る自信を身につける」
 「コミュニケーション能力」 → “問題解決・課題発見”

2. 方策

ポイント ①地域の特性
 ②教員の特性
 ・ゼミの前倒し化
 ・1年次からのフィールドワーク
 ↑ チームで取り組んで解決していく
 ポートフォリオ (自己の成長記録)

3. 評価

- ・ 地域ので就職率
- ・ 数値化…難しい

ボンジーア (D班)

司会者：加藤
 記録者：川上
 発表者：金

1. 大学の理念・目標

①健康で豊かな社会 } 豊かさとは?
 ②研究の発展 } 学年ごとの課題
 ③地域への還元 } 自分→地域→社会 を考える

世界で戦える学生の育成

国際化 > まずは日本を知ること
 地域化 > 縦の交流 (1~4年生の交流) 情報交換

◎内発的な人材作り
 自己選択力 (課題をチョイスする)

2. 方略

世代フリー（人口問題）
スポーツ実技の充実
90分授業→60～70分に短縮化（集中力が途切れないように）
90人授業→30～40人へ

3. 実行計画

コンピテンシー 各学年の課題、目標

- 長期目標 → 学年ごとに「…できる」設定する
- 短期目標 → 個別指導計画

4. 評価

自己評価を重視する 教員が評価する 大学で規定された評価 学生相互評価（他者評価）

- ①卒論…目に見える成果（他に必修科目）
- ②自己の達成とで評価…目に見えない評価

つばさ（E班）

司会者：石川
記録者：田村
発表者：廣部

1. 大学の理念、目標

努力が報われる（正當に評価される）大学
どれだけでもがんばれる大学

2. 方略

- ・カリキュラムの柔軟性→他学部の講義
- ・教育資源の共有化
- ・飛び級ができる仕組み（1年次から研究室に所属できる etc）
- ・アウトプット（コンテスト etc）を求める→評価
- ・どれだけでも頑張れる仕組み作り

3. 実行計画

- ・外部活動で評価されたこと（交流試合、留学、インターンシップ）などを、学内で発表→評価
- ・オープンキャンパスで発表→地域貢献
- ・AO入試の活用→自主性を持った学生の確保

4. 評価

大発表会、企業・学生・教員全員で評価する
発表の機会を大いに設ける



スチューベン（F班）

司会者：呉屋
記録者：古川
発表者：東福寺

大学の理念 「目は世界に、足元は地域に」
地域の特徴に合わせた理念 地域に根付いた大学 でも世界を見つめる

方略 地元就職先を作る
大学と企業が連携して学生を育てることで地元に残ってもらう
金融とも連携して企業を育てる
社会人のスキルアップの場を提供（留学システム）
社会人と学生が交流できる場を提供
社会人向けの大学院

実行計画 文系と理系を繋ぐ学科を作る
でも単位数や学生確保の問題がある
→6年制ならできるかも
インターンシップなど企業で学べるような制度をつくる

評価 目標が達成できたか自己評価を行う
企業にアンケートを行う
カリキュラム作成に地元の人に参加してもらい、評価もしてもらう。

◇グループ作業記録 プログラムⅡ 全体討議記録

F班（スチューベン）→地域と大学の協力

1. 目は世界に、足元は地域に
 2. 地元の学生、地元就職
地域との共生（社会人交流等）
 3. 自己評価 企業の評価
- } カリキュラムの限界がある

E班（つばさ）

1. 努力が報われる大学
頑張っている人（教員・学生）が評価される大学
 2. カリキュラムの柔軟性（他学部も受講可）
教育資源の共有化
 3. 学力に加えて、自主性を持った学生の選抜（入り口）
 4. アウトプット、オープンキャンパス（地域貢献）
- } アウトプットを求める

D班（ボンジーア）

1. ボンジーア大学
健康で豊かな社会、研究の発展、地域還元

2. 卒業した後、再入学させる
3. 各学年ごとの目標（長期）
個別指導（短期）
4. 目に見える評価、目に見えない評価

C班（いも煮）

1. 地域性、チーム学習を重視
2. ①地域の特性を活かす
②教員の特性を活かす
3. 地域における就職率、その他の数値化は難しい

B班（チーム栄屋）

1. 社会に出て役に立つ主体性を持つ学生を育てる
2. 課題探求型、カリキュラムの流動化
3. 学生は勝手に育つ
4. 外部評価、卒論

A班（ラ・フランス）

1. 夢を見つけ叶えられる大学
2. 禅問答
3. 入試は集団討論、入学窓口は1つ、文理は分けない
4. 自己評価
他己評価



プログラムⅢ記録 「科目設計1:授業名と目標,内容の作成」

<h2>ラ・フランス (A班)</h2>	司会者：安田 記録者：竹田 発表者：伊藤
<p>「大学の個性を発揮する授業」 〈例〉山形大学では？→地域性（山形を知る） 弘前大学でも青森に関する講義の選択必修地域学ゼミナール <u>教養（1～2年目）で文理を隔てることなく教育を行う？</u></p> <p>〈例〉京都大学はなぜ個性的？ →教員の個々が（すなわち教員の全体が）個性的</p> <p>〈例〉ハワイにおいて 話すことによって課題を見つけていく（ペチャクチャプログラム）</p> <div data-bbox="277 770 1295 887" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p>・オムニバス？ 目標「重ならない、でも一つを教える」 実際には、横のつながり（教員同士）がないので困難</p></div> <p>〈例〉仙台大学において 「実学と創意工夫」</p> <p>大学の中の授業の一つとして考えていく <u>卒業生が卒後の状況を講義する（職業能力？）</u> →現役（学）生のモチベーションの向上 大学としての個性＝成功した（活躍している）卒業生を呼べる →目標：夢を叶えるために必要なスキルを養う</p>	

<h2>チーム栄屋 (B班)</h2>	司会者：藤野 記録者：鈴木 発表者：前田
<p>作業1：授業名の決定 「ものづくりを考えるⅠ」</p> <p>作業2：学習目標の設定</p> <ol style="list-style-type: none">1. 踏まえておくべき事柄 学生が商品開発を行う。市場調査、設計、サービスよりモノ 会計ソフト使えるように1年生からPC ジャガイモ作る、目に見えるモノ、形あるモノ 1年生から 費用を踏まえて 1年生前期に調査、構想、設計。後期に実際の創作、作成など。2. 学習目標の記述 問題解決能力を身につける 創造的な商品設計を行う 売り込むためのプレゼンテーション能力を身につける	

学生が創造的思考を発揮する

作業3：授業のデザイン

学習方法の種類

形態：演習

オムニバス

5～6人のグループ作業

アイデア出し→市場調査→商品化構想→モノとして設計→

コスト計算、価値評価→最終報告

(評価) 企画書、発表が成果物。教員の評価、専門家の評価、自己評価。

中間報告→改良→P D C A

ルーブリック評価を念頭に

学習のための資源

6人10班=60人

教員2～3人+外部講師

いも煮（C班）

司会者：胡

記録者：川口

発表者：董

『この地域で僕らは何をするのか』（対象：1年生）

目標：①就職後のイメージを踏まえ、地域性、地域のニーズを客観的に把握する

②課題の発見と解決の方法が提案できる力を身につける

③グループワーク、フィールドワークを通じてコミュニケーション能力、協調性を養う

到達目標（4年間）

- ・地域の活性化に貢献できる、地域で働く人材の育成
- ・地域のニーズに対する知識、技術の提供
- ・課題の発見から提案、解決方法の一連の流れができる、身につけることができる

学習方法

- ・講義、座学…必要な知識、研究手法、自ら学ぶスキル
- ・フィールドワーク…座学、書面だけでは得ることのできない実際のニーズの把握
- ・グループ討論…他の人の考えを知ることによって考察を深める、新しい知見
- ・プレゼン…提案力を身につける、自らの考えを周知するスキル

ボンジーア（D班）

司会者：赤間

記録者：湯口

発表者：西園

課題：国際性を培う授業

作業1 「実践異文化交流」

作業2 「自国の文化を理解し、他国の文化を尊重」

- ・主体的に ★自国の文化を**尊重** **説明**
- ・多様な国の方とコミュニケーションを高める ★コミュニケーション
- ・自国のことを自身の言葉で語れる ⇒理解を深め発信

- ・自国文化の発信
- ・単純に知識の深化
- ・他国の文化を尊重

「学生が自国の文化を深く理解し、誇りを持つとともに異文化を理解し尊重する」

- ・コミュニケーションの向上のために → 語学力の向上
非言語の向上
(ボディランゲージ)

「学生が語学力と非言語の両方を向上させ異文化を持つ方とコミュニケーションをとる」

つばさ（E班）

司会者：小西
記録者：橋爪
発表者：田村

授業名 : 21 世紀の諸課題を考える

学習目標 : 学生が考える機会を大いに作る
教員はコーディネートに注力

①授業の目標 : 21 世紀の諸課題を見定め、その解決に向けて行動できるようになる

②到達目標 : 21 世紀の諸課題について科学的に正しい知識を身につける

知識に基づいた議論を行うことができる

あるテーマについての課題を発見し、探求により深めることができる

知的探求の成果を発表することで、内容を広く伝えることができる

授業内容 : 生命倫理、国際政治、環境などのテーマから年間で 3 つを選び、学内外の最先端の研究に触れながら課題解決型学習を行う

1. ガイダンス（グループ学習の在り方など）
 2. ①知識を身につける講義
 3. ②グループ討論で課題発見
 4. ③課題探求、発表準備
 5. ④発表、評価
- 4 回をワンセット
- 6～9. (2セット目)
 - 10～13. (3セット目)
 14. 優秀発表、討論会
 15. リフレクション

グループ学習で折々アウトプットを求めることにより、学生の授業外学習が促される。

グループ学習向けの机などの移動が可能な教室が望ましい。

スチューベン（F班）

司会者：渡部
記録者：新井
発表者：古川

キャリア形成と職業

→幹部候補

学習目標の設定

企業の求める人材、問題解決能力
働く目標、意義と自分で理解して説明できるようになる

ベンチマーク

- （ ・月給30万円を得るためには、どういったスキルを身につけさせるべきか？
・企業の求める人材 ↓
・目的意識 目標をはっきり言えない学生が多い→目標意識をもたせる ）

何を分からせるべきか

- ・業種、職種を絞り込めるようになる
- ↓
- 建設、医療など → 営業、開発等
- ・自己能力を認識できる

授業内容

- ・企業研究（業種、職種）のための手法、手段を講義する
- ・企業に就職した先輩、時の人ら（企業の有名人など）による講義
- ・グループを作って、メンバー各自で調査、発表を行う
- ・仮想の会社に対して履歴書を書いて、仮想面接を学生間で行い、学生同士で評価し合う
- ・最後は複数の業種の人事担当者に履歴書を評価してもらう

必要な資源

- ・インターネット
- ・企業人材

◇グループ作業記録 プログラムⅢ 全体討議記録◇

D班（ボンジーア）

課題－国際性を培う

作業1：「実践型異文化交流」

- 2：自分の文化を知らねば交流はできない
自分の文化を発信して異文化交流を行う
学生が語学力と非言語の両方をもってコミュニケーションをはかる
- 3：華道、茶道の実践を含めての学習

E班（つばさ）

- 1 21世紀の諸課題を考える
- 2 諸課題を見定め、その解決に向けて行動できるようになる

最先端の正しい知識現状を理解する

3 3つのテーマに関し4回を1セット→オムニバス

F班 (スチューベン)

1 キャリア形成と職業

働く目標、意義を理解して説明できるようになる

2 授業内容 企業研究をするための手法、手段を講義する

仮想会社に対して履歴書を出して面接を行う

資源、インターネット、企業人材

A班 (ラ・フランス)

授業名：社会で夢を叶える (仮)

授業内容：卒業生 (活躍している人) の体験談を聞く

自分の夢は何か、そのために何を学ぶかを各自で発表してもらう

B班 (チーム栄屋)

1 授業名：ものつくりを考える I

2 学生が商品開発を行う 市場調査

問題解決能力を身につける 創造的な商品設計を行う

3 演習、オムニバス、アイデア出し→商品化構想→P D C A

評価：ループリック評価、外部教員も取り込む

C班 (いも煮)

1 授業名：この地域でぼくらは何をするのか? (対象1年生)

目標：就職後のイメージを踏まえ、地域性を客観的に把握する

課題の発見と解決、協力・協調性を養う



プログラムⅣ記録 「科目設計2:シラバスの完成」

授業科目 社会で夢を叶える（大学の個性を発揮） （ラ・フランス/A班）

担当教員： 担当教員の所属：各分野

開講学年：1年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：講義・演習

開講対象： 科目区分：

【授業概要】

・テーマ

大学に入学した意義を考え、自分なりの答えを導きます。

・ねらい

大学の個性は、輩出した卒業生の個性です。本講義では、卒業生から大学で学んだことや、ためになった授業、大学入学したときの夢、現在の状況、社会に出てからの失敗談、今後の夢などを講演していただきます。そのあと、お互いを感じたことをグループディスカッションします。そして、期末に自分自身の夢とその具体的なアプローチ方法についてプレゼンをしてもらいます。

・目標

- ① 卒業生の講義を文章にでき、要約できる。
- ② 自分の意見をいい、お互いの意見を尊重できる。
- ③ 自分自身の夢を設定できる。

・キーワード

コミュニケーション、キャリアデザイン、大学の個性

【授業計画】

・授業の方法

卒業生の講演を聞き、感想をグループディスカッション
期末にプレゼンテーション

・日程

第1回 ガイダンス
第2回 現在の自分についてまとめる
第3回～第12回 卒業生の講演を聴講し、グループディスカッション
第13回～第15回 プレゼン発表会

【学習の方法】

・受講のあり方

グループディスカッションで積極的に発言する。

・予習のあり方

講演者の業種や業界を調べ、どのような仕事をしているか調べておく。

・復習のあり方

インスパイアされたことをノートにまとめる。

【成績評価の方法】

・成績評価基準

卒業生の講演から得たことや、自分の現状を的確に捉え、言葉にできることを評価します。
グループディスカッションでの役割分担や発言を評価します。
プレゼンの論理展開を評価します。

★評価は相互評価です。

・方法

毎回のレポート（30%）、グループディスカッション（30%）、期末プレゼン（40%）

【テキスト】【参考書】

講演資料を適宜配布する。

【科目の位置付け】

キャリアデザイン

【その他】

・学生へのメッセージ

自分自身の夢をみつめ、具体的な人生設計を立ててください。

- ・履修に当たっての留意点
- ・担当教官の専門分野
各分野

授業科目名 ものつくりを考える I (チーム栄屋/B班)

担当教員：() 担当教員の所属：
開講学年：1年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：演習
開講対象： 科目区分：

【授業概要】

- ・テーマ
「主体的に考える力を育成する授業」
学生が世の中で売れる商品開発を行う。
市場調査、設計、提案、評価。
サービスよりモノ（目に見えるモノ、形あるモノ）
1年生後期に調査、構想、設計。
- ・ねらい
学生が創造的思考を發揮する。
- ・目標
 - ・問題解決能力を身につける
 - ・創造的な商品設計を行う
 - ・売り込むためのプレゼンテーション能力を身につける
- ・キーワード
ものづくり、創造的思考、企画設計、問題解決、プレゼンテーション

【授業計画】

- ・授業の方法
形態：演習、オムニバス（教員）
5～6人のグループ作業

授業のプロセス
アイデア出し→市場調査→商品化構想→モノとして設計→コスト計算→価値評価→最終報告
中間報告→改良→最終報告（PDCA）

中間報告
5分（発表）+2～3分（質疑）

最終報告
7～8分（発表）+5分（質疑）
- ・日程
第1回 オリエンテーション（目的、グループ分け）
第2回 何を作るか？（課題設定）
第3回 作るモノの具体化
第4回 市場方法の検討
第5回 市場調査①
第6回 市場調査②
第7回 企画書作成①
第8回 企画書作成②
第9回 企画書作成③
第10回 中間報告
第11回 修正作業①（PDCA）
第12回 修正作業①（PDCA）
第13回 修正作業①（PDCA）
第14回 最終報告①
第15回 最終報告②

【学習の方法】

- ・受講のあり方
1) グループディスカッションにおいて主体的に取り組む

2) 毎週出席し、提出期限を厳守する（企画書）

・予習のあり方

1) 企画が必要な情報収集を心掛ける

・復習のあり方

- 1) 授業到達目標に完成するように自主的にグループワークを行う
- 2) 中間発表後、指摘・助言を受けて改善する

【成績評価の方法】

・成績評価基準

（評価）企画書、発表（プレゼン）を成果物として評価
教員の評価＋専門家の評価＋自己評価

ルーブリック評価

・方法

6人10班＝60人（1クラス）
教員2～3人＋外部教員

【テキスト】

配付資料

（マーケットリサーチ、PDCA、プレゼンテーション方法などの最低限の知識について教員が予め作成した資料）

【参考書】

「ものづくりの教科書」（革新のための7つの手法）日経BP社
（Amazonで星が5個！）

【科目の位置付け】

1年生の導入教育の中で、創造的思考力、社会構造の理解、個人の主体性などを身につける

【その他】

・学生へのメッセージ

・履修に当たっての留意点

・オフィス・アワー

・担当教官の専門分野

授業科目名 この地域で僕らは何をするか（いも煮/C班）

担当教員：（ ） 担当教員の所属：

開講学年：1年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：演習

開講対象： 科目区分：

【授業概要】

・テーマ

地域貢献について自ら考え提案する

・ねらい

地域の特徴を分析、フィールド調査した上で、地域に貢献する具体的な提案を行う

・目標

- ① 就職後のイメージを踏まえ、地域性を客観的に把握する
- ② 課題の発見と解決の方法が提案できる力を身に着ける
- ③ チームでの調査・グループ・フィールドワークを通じてコミュニケーション能力、協調性を養う

・キーワード

地域貢献、フィールドワーク、チームワーク

【授業計画】

・授業の方法

グループワークおよびフィールドワークを中心とした実習・演習形式

・日程

- ① ガイダンス
 - ② 地域の現状把握のポイントおよび分析方法について
 - ③ テーマ設定 調査方法のデザイン構築
 - ④ テーマ等についての報告・相談・調整（地域の方も参加）
 - ⑤ フィールド調査
 - ⑥ フィールド調査
 - ⑦ フィールド調査
 - ⑧ 調査まとめ
 - ⑨ 中間報告（調査に関係した地域関係者の外部評価も含む）
 - ⑩ 反省（他グループの評価）および調査デザインの再検討
 - ⑪ 再調査
 - ⑫ プレゼンテーション準備
 - ⑬ プレゼンテーション準備
 - ⑭ 総まとめ・発表
 - ⑮ 総まとめ・発表
- 備考：回目～回目は隔週で二コマ連続とする

【学習の方法】

・受講のあり方

1. 日常生活から地域への関心を持ち観察すること
2. 予習復習をしっかりと行うこと
3. 新聞を読み、時事に関するニュースを把握すること
4. 主体性をもって自身の考えを述べること

【成績評価の方法】

・成績評価基準

- ・ 中間および最終報告のプレゼンテーション
- ・ 調査デザイン企画書
- ・ チーム同士の評価、外部による評価
これらを総合的に判断する

・方法

平常点（20％）、授業への貢献（ディスカッション・調査への参加など）（50％）、報告の内容（30％）

【テキスト】

特になし

【参考書】

適時に指示する

【科目の位置付け】

課題解決型科目の入門科目として、他の科目の学習の動機づけを図るものである。

【その他】

- ・ 学生へのメッセージ
- ・ 履修に当たっての留意点
- ・ オフィス・アワー
- ・ 担当教官の専門分野

授業科目名 **実践 異文化交流**（ボンジーア/D班）

担当教員：

担当教員の所属：

開講学年：1～3年

開講学期：後期

単位数：単位

開講形態：

開講対象：

科目区分：

【授業概要】

- ・ テーマ
- ・ ねらい

・目標

- ①学生が自国の文化を深く理解し、誇りを持つとともに異文化を理解し、尊重することができる。
- ②学生が言語的、非言語的な手段を用いてコミュニケーションをとることができる。

・キーワード

言語的・非言語的コミュニケーション、異文化、スポーツ、レクリエーション、

【授業計画】

・授業の方法

・日程

- 第1回
- 第2回
- 第3回
- 第4回
- 第5回
- 第6回
- 第7回
- 第8回
- 第9回
- 第10回
- 第11回
- 第12回
- 第13回
- 第14回
- 第15回

【学習の方法】

・受講のあり方

・予習のあり方

自己の文化・異文化について調べる。

・復習のあり方

【成績評価の方法】

- 1) 知識 30% (テスト)
- 2) 態度 30% (出席、提出、レポート)
- 3) 技能 30% (他者評価・自己評価)
- 4) 習慣 10% (自己評価)

・方法

事前：学生の異文化に対するレディネス把握のためにアンケートを実施

中間：事前アンケートを用いて評価指標を作成

事後：学生の自己評価・他者評価、

【テキスト】

【参考書】

【科目の位置付け】

【その他】

・学生へのメッセージ

・履修に当たっての留意点

・オフィス・アワー

・担当教官の専門分野

授業科目名 21世紀の諸課題を考える (つばさ/E班)

担当教員： () 担当教員の所属：

開講学年： 2年 開講学期： 前期 単位数： 2. 単位 開講形態： 講義・演習

開講対象： 全学部 科目区分： 教養科目

【授業概要】

・テーマ

21世紀の諸課題（以下の諸分野）の中から学生自身の問題意識に基づいて選択する。
生命倫理（再生医療、遺伝子組み換え、iPS）
国際政治（国際社会情勢、少子高齢化）
地球環境（技術革新、エネルギー政策）

・ねらい

21世紀の諸課題を見定め、その解決に向けて行動できるようになる。

・目標

- (1) 最先端の正しい知識・現状を理解する
- (2) 課題探求能力を身につける
- (3) 正しい（科学的根拠に基づいた）知識をもとに論理的に議論する
- (4) プレゼンテーション法を身につける

・キーワード

共生、遺伝子組み換え、iPS細胞、エネルギー政策、少子高齢化、技術革新、国際社会情勢

【授業計画】

・授業の方法

21世紀の諸課題に関連する複数のテーマについて最先端の知見を基にグループ学習により課題探求学習を行い、その成果を発表し合う活動を繰り返し行うことで課題解決の力を身につける

・日程

1. ガイダンス（グループ学習の在り方）
2. 講義：生命倫理の現在
3. ディスカッション：21世紀の生命倫理の課題を考える
4. 課題探求：前回発見したグループ学習の課題を個々の授業外学習で深め、この日まとめる
5. 発表：「21世紀の生命倫理」
6. 講義：
7. ディスカッション：
8. 課題探求：
9. 発表：
10. 講義：
11. ディスカッション：
12. 課題探求：
13. 発表：
14. 年間優秀発表・討論会
15. リフレクション

【学習の方法】

・受講のあり方

21世紀の諸課題を理解し、自ら（主体的に）その解決に挑む心構えを持つ。
学習に必要な予復習、技術を身につけることに積極的に取り組む。
学びから課題発見、発表の流れを繰り返す中で常に改善を心掛ける
学内のラーニングコモンズ等の施設を活用し、授業外でも積極的に集まって活動することが推奨される

・予復習（授業外学習）のあり方

様々のテーマに関連して常に新聞記事などからの情報収集を心掛ける
講義の疑問点は質問するか、授業外学習により調査し、知的理解の上に議論、課題探求を行うことを徹底する
議論が単なる課題発見に終わらないよう、授業外学習により発見した課題をより深め、課題を探求する姿勢を明確にする
発表は単に発表するだけでなく、伝えなかった内容がきちんと伝わってくるか、客観的評価を行うほか、発表時に指摘を受けた改善点は授業外学習により「必ず」次回にはクリアしておくこと

【成績評価の方法】

・成績評価基準

- (1) 最先端の正しい知識・現状の理解
- (2) グループ学習により他者意見を容れて課題探求を行う
- (3) 正しい（科学的根拠に基づいた）知識をもとに論理的に議論する

(4) プレゼンテーションにより自らの考えを他者に伝える

・方法

知識に関する客観テスト
授業に関する質問等、積極的な試みを加点の対象にする
発表内容の教員による論理性、知識の正確性に関する評価
プレゼンテーションの学生による相互評価
学生の自己評価を

【テキスト】

資料・プリントを配布する

【参考書】

適宜指示する

【科目の位置付け】

【その他】

- ・学生へのメッセージ
- ・履修に当たっての留意点
- ・オフィス・アワー
- ・担当教官の専門分野

授業科目名 **キャリア形成と職業** (スチューベン/F班)

担当教員： () 担当教員の所属： 基盤教育

開講学年： 1年 開講学期： 後期 単位数： 2単位 開講形態： 演習

開講対象： 全学 科目区分：

【授業概要】

- ・テーマ
職業意識と労働意欲を培う。
- ・ねらい
働くことの目標、意義を具体的に説明することができるようになること。
- ・目標
業種と職種を意識した履歴書を書くことができるようになる。
- ・キーワード
キャリア形成、就職、履歴書、面接、社会マナー

【授業計画】

- ・授業の方法
講義とグループワーク、およびフィールドワーク。
- ・日程
 - 1回目 ガイダンス、グループ分け
 - 2回目 講義：世の中の業種と職種 (国内、国外問わず)
 - 3回目 グループワーク：世の中の業種と職種
 - 4回目 講義：職業人に聞く
 - 5回目 グループワーク：ポスターの企画および作成
 - 6回目 グループワーク：ポスター発表 (各班5分発表、3分質疑)
 - 7回目 講義：職業を知る (業種・職種のリサーチ)
 - 8回目 グループワーク：企業研究
 - 9回目 グループワーク：企業研究について発表
 - 10回目 フィールドワーク：職業を見る
 - 11回目 グループワーク：職業について発表
 - 12回目 講義：履歴書の作成方法

- 1 3 回目 グループワーク：履歴書の作成
- 1 4 回目 グループワーク：学生同士の履歴書の検証
- 1 5 回目 グループワーク：履歴書の完成

【学習の方法】

- ・ 受講のあり方
主体的に学ぶ
- ・ 予習のあり方
参考文献の検索方法を調べる。
業種、職種に関するキーワードを考える
- ・ 復習のあり方
授業で習った参考文献の検索の方法を使用して再度検索

【成績評価の方法】

- ・ 成績評価基準
履歴書の不備の部分を把握できたか。
業種、職種について具体的に説明できるか。
- ・ 方法
ポートフォリオの提出（中間に1回）
履歴書の提出（最終に1回）
リアクションペーパーの提出（授業ごと）
口頭発表

【テキスト】

適宜プリント配布

【参考書】

四季報
求人雑誌
ハローワークの配布資料
履歴書の書き方に関する本

【科目の位置付け】

キャリア形成の導入

【その他】

- ・ 学生へのメッセージ：卒業後の職業について考えよう。
- ・ 履修に当たっての留意点：意欲的に取り組むこと。知らないことを明確にしよう。
- ・ オフィス・アワー：適宜対応
- ・ 担当教官の専門分野：特に指定なし

◇グループ作業記録 プログラムⅣ 全体討議記録◇

C班（いも煮）

地域貢献について具体的な指導を行う，大学の使命のひとつ，1年後期開講
1年生の学びの動機づけ，地域性の把握，課題を発見・解決
座学（2，3回），（意識の共有，調査方法），チームの活動，実地調査
中間報告，反省会，再調査，評価はチーム間の評価

B班（チーム栄屋）

「ものづくりを考える」1年後期，主体的に考える力を養う 学生が世の中で売れる商品を提案する。
問題解決能力を身につける，演習とオムニバス。
アイデア出し，商品化構想，2回学生から報告してもらう，10回目中間報告，14.15回最終報告，
提出締切厳守は厳しく行う，企画書・発表の内容を評価。

A班 (ラ・フランス)

- ・夢を叶えられる大学→1年後期 演習/卒業生による講義 それらから学生がどのように感じるか→要約できるようにする
- ・キーワード：キャリアデザイン, コミュニケーション
- ・日程：ガイダンス, 卒業生の話, ディスカッション, プレゼン
- ・評価：漠然とした目標から, どのように具体化できたか

F班 (スチューベン)

- ・履歴書を書けるようにする。講義→グループワーク→プレゼン/フィールドワーク④
- ・日程：④のサイクルを繰り返して履歴書を書けるようにする。
- ・学習の方法→主体的に学ぶ
- ・評価：今後の課題をはっきりさせる

E班 (つばさ)

- ・21世紀諸問題を考える/テーマ 生命倫理, 国際政治, 地域環境からテーマを選ぶ。
- ・目標：課題探求能力を身につける, 正しい知識を基に論理的に議論する。
- ・授業計画：グループ学習により課題探求学習
- ・学習方法：主体的に解決に向かうようにしてもらう。それを評価に結び付けるようにする。

D班 (ボンジーア)

実践異文化交流→外国人と交流したというのをどう評価するか。他国の文化などをどれだけ理解したのか評価。最後に、自己評価を出してもらう。今後にどのように活かすことが出来るかなど。

【第2チーム】FD合宿セミナープログラム及び記録

○プログラム抜粋

FD合宿セミナーに当たって

山形大学では、平成13年度よりこの合宿セミナーを実施し、教養教育の目標や授業の企画、シラバス作成を通して授業のスキル向上を実現するとともに、学部間の人的交流の拡大・充実を図ってまいりました。このような基盤のうえに、さらに「授業改善」に焦点化したアドバンスプログラムを実施することになりました。

このセミナーの第一の目的は、「個人個人の教員が教育者としての自己認識の深まりと学生の学びを大切にする授業、および授業改善の方法を具体的なケースを交えて考察・議論し、学生を中心とする教育・授業を発展させること」です。この目的を達成するために、本セミナーでは4つの参加型ワークショップを行います。これにより、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することにもなります。

また、「ワークショップを共通の題材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後には、参加者が大学の教育分野全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーはFDネットワーク“つばさ”の参加校を始めとして、全国の大学等にかかれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されんことを願っております。



第2チーム参加者と山形大学 安田理事（前列中央）

第15回 山形大学FD合宿セミナー日程表

期 間 第2チーム：9月8日（火）～9日（水）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当
13:00	山形大学小白川キャンパス集合	
13:15	送迎バス大学出発	
14:00	会場到着・記念撮影 セミナー開会 開会のあいさつ	
14:30	オリエンテーション	小 田
14:40～15:10	アイスブレイキング	田 実
15:10～16:50	プログラムⅠ「学生のニーズに応える授業とは？－大学教員の美し き誤解とインタラクティブな授業の工夫」	田 実
16:50～17:00	休憩（10分間）	
17:00～18:10	プログラムⅡ「学生の学修を支援する授業とは？－発達障害等の配 慮を必要とする学生が受講している授業の工夫」	田 実
18:10～	夕食・懇親会	
20:30～	入浴・休憩	
22:30	就寝	

○第2日目

時 刻	項 目	担 当
7:30～	朝食・部屋の清掃・部屋退出	
8:30～10:00	プログラムⅢ「授業力の向上－わかりやすい授業を実現するた めに－」	大 島
10:00～10:10	休憩（10分間）	
10:10～11:40	プログラムⅣ「研修のふりかえりとまとめ」	大 島
11:40～	修了式（ポストアンケート）	
12:15	送迎バス出発	
13:00頃	山形駅経由 大学到着・解散	

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓してください。
 - 寝室では、飲食はご遠慮ください。

オリエンテーション

1 FDの必要性

- ① 大学の組織的教育力の向上
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学教員個々の教育力の向上
- ④ 大学生の質的变化への対応
- ⑤ 大学の社会的な教育責務の明確化

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えることの位置付け。
- ② 学生一人ひとりの発達と同様に教員一人ひとりが同僚の力を得て発達することを改めて確認する。
- ③ 教授法について共に考え、スキルアップする。
- ④ 教員相互の交流。

3 セミナー形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：6班
「プログラムⅠ・Ⅱ」（1日目）と「プログラムⅢ・Ⅳ」（2日目）で、班構成を替えます。
- ③ プログラムによっては、全体での発表の際に記録をとるための記録係を置く場合があります。また、グループワークにおいて、各班に、司会者、記録係等を置く場合もあります。
- ④ 「③」で記録したものは、各プログラム終了後に提出していただきます（この記録は、こちらでコピーした後、速やかに全班に配付します）。
- ⑥ 最終日に合宿セミナーに関するポストアンケートを実施します。

プログラムⅠ「学生のニーズに応える授業とは？—大学教員の美しき誤解とインタラクティブな授業の工夫」

ここでの課題

プログラムⅠ「学生のニーズに応える授業とは？—大学教員の美しき誤解とインタラクティブな授業の工夫」では、学生による授業評価アンケートに関するデータや知見から、学生主体型授業に求められているニーズと具体的な授業方法について解説します。その後、インタラクティブな授業をプレゼン体験して頂きます。

○ プログラムの講師による講義	60分	
○ 実践交流	15分	
○ グループでの協議・プレゼン説明	5分	
○ グループでのプレゼンとまとめ	20分	全体で100分

プログラムⅡ「学生の学修を支援する授業とは？－発達障害等の配慮を必要とする学生が受講している授業の工夫」

ここでの課題

- 発達障害のある学生についての講義Ⅰ 20分
- 発達障害の疑似体験 20分
- 発達障害のある学生についての講義Ⅱ 15分

プログラムⅡでは、最近増加傾向にあると言われている発達障害のある学生に対して、文科省等の考え方を踏まえつつ、発達障害をどのように理解し授業や学生生活においてどのように支援していくことができるか、について事例を交えながらお話したいと思います。また、発達障害のある人の情報受容のやり方等を体験する場面も設定する予定です。

- まとめと質疑応答 5分
全体で60分

プログラムⅢ「授業力の向上－わかりやすい授業を実現するために－」

ここでの課題

プログラムⅠ～Ⅱで検討した学生のモチベーション向上、授業への参画を実現するためには、まず教える教員自身に指導力・授業力が求められます。「わかりやすい」「興味の湧く」授業を実現するにはどうしたらいいのか。このセッションでは、授業スキルの向上という基本に立ち返り、講師の体験に基づく講義をベースにディスカッション形式で考えを深めます。

- プログラムの講師による内容の説明 5分
- 「授業力向上のためには－ケーススタディ－」 55分
→次頁のレジュメにそった講義
- 「よりよい授業を目指して－ディスカッション－」 30分
→講義内容を踏まえ、よりよい授業を実現するためのポイントを整理する。
→自分の持っている問題点の洗い出しと解決策の模索を行う。
全体で90分

【ケーススタディ ～私の授業法～】

1. ガイダンスのしかた

- 必ずワンペーパー作って渡す。 ← 最初の3週間で徹底

2. 授業の組み立て方

- 90分を3つのパートにわけると ← 話しの構造化
- 時間の使い方を予告し、守る。 ← 全体像を見せることが大切
- 「つかみ」が大切（冒頭に力点） ← 終わりはすっきり

3. 効果的な表現技術

- 言語表現の工夫
 - ・「例示」の多用 ← 相手に合った例を挙げる
 - ・「つなぎ言葉」の活用 ← ゆっくり間を取って話す

・「用語」の選択と位置付け ← 新出語に注意

■ 非言語表現の効果

- ・身体表現 ← gesture と posture の使い分け
- ・対人距離 ← 机間巡視／指導はどこまで有効か
- ・アイコンタクト ← プレッシャーと激励

4. 授業ツールの活用

【提示資料】・・・ 学生の注意を惹きつける

■ 「聴かせる」と同時に「見せる」 ← 視覚効果は絶大

Cf. 日常生活における知覚機能別情報量

視覚83% 聴覚11% 嗅覚3.5% 味覚1.5% 触覚1%

(小林敬誌他著『プレゼンテーション技法・演習』より)

← やりすぎは逆効果

Cf. 木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり (蓮如)

■ 板書は最高のビジュアル ← 小学校時代からのお約束

【配付資料】・・・ 学生の手元に残す

■ レジユメの効果 ← 情報を与えすぎない

■ 教科書の使い方 ← 買わせたら使う

5. 双方向性の確保

■ 発問のしかた ← 大切なのはリズム

■ 紙ベースでのやりとり ← ex) 巨大出席カード 大手前短大「なるほどポイント」

6. 評価のしかた

■ 「合わせ技」が基本 ← 内訳をシラバスに明記

ex) 参加 10% 小テスト 40% 発表 20% 提出物 30%

■ 個人情報保護と説明責任 ← 授業期間と終了後で区別

7. まとめ

■ アリストテレスの話し方 3 要件 ← ログス・パトス・エートス

プログラムⅣ「研修のふりかえりとまとめ」

ここでの課題

プログラムⅢで議論、検討したより良い授業を実現するためのポイントについて、各グループに発表していただき、全体での分かち合いを行います。また、2日間の研修を通じて、自分のコミュニケーションスタイルが他人にどんな印象を与えたのか、イメージ交換ゲームを通じてふりかえります。

- プログラムⅣの検討結果のプレゼン 5分×6班 30分
- イメージ交換ゲームの実施 30分
- イメージ交換ゲームのふりかえり 15分
- 研修全体のまとめ ー学びをFDに生かしていきましょうー 20分 全体で90分

プログラムⅠ記録「学生のニーズに応える授業とは？－大学教員の美しき誤解とインタラクティブな授業の工夫」
プログラムⅡ記録「学生の学修を支援する授業とは？－発達障害等の配慮を必要とする学生が受講している授業の工夫」



プログラムⅢ記録 「授業力の向上—わかりやすい授業を実現するために—」
プログラムⅣ記録 「研修のふりかえりとまとめ」



○自由記述

(1)第1チームの回答

① このセミナーにおいて、良かったと思う点

- ・専門や立場にかかわらず課題について協議できた。
- ・昼だけでなく、夜の飲み会でも他大学の先生と交流を深め、様々な大学の様子を知れたこと。特に自分と異なる分野の先生と一緒に作業できたこと。
- ・全く異なる大学から6名集まり、多角的な議論ができて、交流も含めて自分自身にも良い勉強になりました。
- ・まさにアクティブラーニングを体験できた点。
- ・各大学の先生方と頭を突き合わせて色々議論できたことは良かったと思う。
- ・他大学、他分野の方々の意見や考え方を知ることができて良かった。実際に行っている活動や、現状を知る機会はないので、貴重な経験となった
- ・他分野の考え方を聞いておもしろかったです。
- ・短い時間に多くの人の意見を傾聴でき、なおかつ出された意見を整理し、考察までできたことがよかった。他の大学の現状も知ることが出来た事が良かった。
- ・様々な大学の先生方と交流ができたこと。
- ・大学教育の現状に対する理解が深まったこと。
- ・小田先生の教育に対する情熱を知り、刺激を受けたこと。
- ・分野の異なる人と意見を交わすことができる機会はなかなか得られないので、このような場は非常に良かったです。特に私は新人なので、経験豊富な先生方の意見が聞けて良かったです。
- ・異分野の様々な発想等を聞くことができました。貴重な体験ができました。
- ・他校教員との交流
- ・異なる専門分野の教員の意見が聞けただけでなく、議論、情報交換ができたことがよかった。
- ・さまざまな学問背景、年代、大学の人達からいろいろな意見を聞くとともに、議論できた点が非常に良かった。
- ・時間管理が厳格であったこと。
- ・他大学の若い先生と真剣に議論できたこと。
- ・会場が良かった、立地など。
- ・様々な専門・大学の教員との意見交換や目標に向けての意見の集約を経験できたこと。研修所も設備が整っていてとても良かったです!!
- ・教員同士が力を合わせて作業することの大切さを学びました。時間の制約を設けることの大切さを学びました。
- ・フレンドリーな雰囲気です。深い議論ができたこと。
- ・学生主体型授業を経験できた事が良かった。
- ・積極的に参加できるシステムが良いと感じた。
- ・授業計画について勉強になりました。
- ・仲間ができた。
- ・グループワークがチームメンバーの協力的な姿勢に助けられて充実していた。
- ・サポートがとても良かったと思います。
- ・グループ内の先生方がとてもフレンドリーでとても良い交

流ができました。

- ・分野の異なる先生方とディスカッションができて、多様な価値観を知り理解が深まりました。
- ・たくさんの意見を取り入れ、今後の教育活動にいかしていきたいと思います。
- ・異(他)分野の先生方が様々な視点から意見を述べ、自分には無い視点を学ぶことが出来た。
- ・同じ苦労や悩みを持っていることがわかった。
- ・知識不足、能力不足を痛感しました。
- ・教育に関する知らないキーワードを知ることができました。今までなんとなくしか考えていなかったことに真剣に取り組むことができました。
- ・自由に発言し、自分の身にできる環境。
- ・時間を区切ったディスカッション。他分野の方々の意見。
- ・私学の先生から意見を聞くことができ刺激になった。
- ・チーム活動での意見交換出来、有意義。
- ・各大学ので活動・問題意識が共有できた。
- ・様々な大学・分野からの先生の参加・相互理解・コミュニケーション等。
- ・様々な分野からの先生たちが集まり、いろいろな発想を持つことができた。

② このセミナーにおいて、良くなかったと思う点(改善すべき点)

- ・いそぎすぎた感がある。もっと個を知る工夫があるとよい。
- ・宿泊施設などでしょうか?
- ・食事・懇親会の流れが円滑でなかった。
- ・蔵王を利用すべし。夜遅くまで飲みましょう。
- ・少しスケジュールがタイト。会場、とくに宿泊施設がいまいち。
- ・班でのつながりが強くなりましたが、他の班との交流をあまり持つことができませんでした。
- ・とくになと思います。ただ、私のように偏った考えを持った者にはつらい作業でした。このような学生もいるということをもっと学びました。
- ・プログラムⅠをやってみて要領がわかったので、事前の説明を少し丁寧にしてほしかった。
- ・宿泊施設に関して、施設の設備を充実させてほしい。
- ・グループワークのルール(他者の意見を尊重する)などのオリエンテーションも必要だったかもしれない。
- ・グループワークの時間が短かった。
- ・求められているゴールが見えにくかった。
- ・もう少しゆったりした流れがあつたら良かった。
- ・プレゼンテーションの設備環境の改選。
- ・大学のレベルが違くと共通の課題が設定・議論しにくい。
- ・ディスカッションとプレゼンテーションの間に資料作成の時間を明示的に設けていただきたい。
- ・特にありません。これからも続けてください!!
- ・プログラムⅢ説明の文書について、課題内容と注意点が少し分かりにくい部分があり、シンプルになるとより取り組みやすいと思いました。後はとても良かったです。